

ヒ素ミルク事件 60年記録

「守る会」県本部DVD

悲惨さ 後遺症の苦悩

「次世代へ風化させぬ」

県が原因を発表してから、60年を迎えた森永ヒ素ミルク中毒事件。県内の被害者らは26、27両日、和歌山県・高野山の慰霊碑を訪れ、犠牲者を追悼する。被害者の多くが還暦を過ぎ、遺族や家族らも高齢となった今、悲惨な事件を風化させまいと各地で取り組みが続く。県内の関係者も事件を記録したDVDを製作。直接知らない若い世代への伝承を誓う。(三島浩樹)

参加するのは、「森永ヒ素ミルク中毒の被害者を守る会」県本部のメンバー。慰霊碑は1985年、森永乳業が建立し、県本部は2005年から5年おきに訪れ、犠牲者の冥福を祈っている。そして、節目の年に合わせて企画したのがDVD



完成したDVDを手に、「絶対に風化させはけない」と話す菅野さん(岡山市北区)

にまとめた。

さらに、被害者の苦悩をナレーションで説明。「食品に対する注意義務が欠如

検査、研修…安全を徹底 森永乳業

森永乳業は事件後、安全性や品質を三重にチェックする体制を構築した。原材料の仕入れ前に、供給元からサンプルを取り寄せて分析。調達後も工場でも安全性を確認してから、製造工程に回す。製品も出荷前に

検査している。

継承にも取り組む。1974年から新入社員研修で、事件の詳しい経緯や救済事業などを役員らが説明。「森永ヒ素ミルク中毒の被害者を守る会」と定期的に話し合いの場を持つ

ち、守る会側の提案を受け、2011年からは、入社7年目の社員を対象にした研修で同会幹部の講話も始めた。

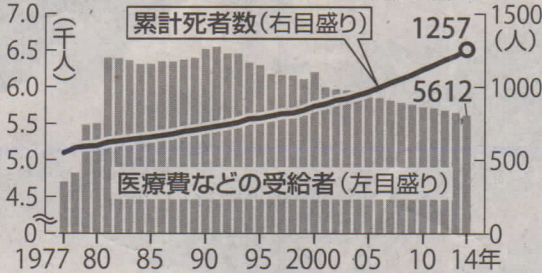
実際に話をした平松正夫事務局長(61)は「事件の悲惨さ、直後の対応の不足を

していた」「消費者の命より、高度成長を支える企業利益のほうが優先された」など、現代にも通じる教訓も盛り込んだ。

県本部の60年記念行事実行委員長として、製作に携わった菅野孝明さん(60)(岡山市中区)も後遺症と疑われるぜんそくと皮膚病を抱える。「後遺症に苦しむ被害者は多い。高齢化が進み、記録を残すにはこのタイミングしかないと思った」といい、「食の安全が問われた日本で最初の事件。絶対に風化させてはならない」と強調する。

竹谷裕之・名古屋大学教授(食糧生産管理学)の話「森永の事件を教訓に食の安全に対する取り組みは、大手企業を中心に格段に向上した。しかし、異物混入などが相次ぐのは、原材料の供給元が中国や東南アジア、中南米など世界各国に広がり、コストを重視しすぎて、チェック体制が不十分になってきているからではないか。安全がブランドになる時代だからこそ、食品会社として当たり前のことにコストをかけるべきだ」

医療費などの受給者数と累計死者数



被害者全国1万3440人 肺がんなど闘病者も

倉敷市の男性(60)は森永乳業の粉ミルクを飲み、中毒症状を発症。小学生の時には腎臓病を患い、成人後もバセドウ病などに悩まされた。3年前には肺がんが見つかり、現在は岡山市内の病院に入院し、闘病生活を送っている。

厚生省(現厚生労働省)は1956年6月、被害者は1万2131人で、うち130人が死亡したと発表した。しかし、その後も被害を訴える人は後を絶たなかった。このうち、医療費などの受給者は、91年度の6548人をピークに減少し、2014年度は5612人。死亡者の累計は、07年度に10000人を超え、14年度は1257人になった。